〈研究ノート〉

ネパール山村僻地における学校建設に関する意識変容（1）

——ジリ村アラン地区（ジレル族）の記録から——

松田　　實・日隈　健壬

（受付　2000年5月10日）

目　　次

調査研究の目的	231頁
第1節　ドラカ（Dolakha）の人と暮らし	233〃
1　ジリ村とジレル族	234〃
2　出稼ぎする人々	240〃
第2節　ドラカの教育	249〃
1　就学の実態	254〃
1）チェルドン小学校の子供たち	254〃
終わりに	262〃
引用文献	264〃
参考文献	264〃

調査研究の目的

ネパール文部省統計（1971）によると，ネパール開国時（1951），小学校は全国で321校，生徒数8,505人，就学率0.9%に過ぎなかった。その後の20

---

* この調査研究ノートは松田實の修士論文（2000，8，広島修道大学大学院人文学研究科社会学専攻，提出）に一部重複するが，指導教授日隈健壬の研究と重ね合わせて共同研究としてまとめたものである。

ジリ村（ジレル族）アラン区における校舎の建設に関する調査記録は松田自身によるものである。

年（1970）で小学校は20倍，生徒45万人，就学率32%にまで達した。しかし，他の途上国と同様にネパールでも1983年には全国で215万人と急激に増加する就学生徒を受け入れるには，都市部では教室の不足をはじめ，農村部では就学後の生徒の落伍者が増加していく傾向が強いのも，ネパールが抱える問題を象徴している。

現実には1990年代に入って，70%を超える就学率でありながらも，農山村の子供たちは家畜の世話から，水汲み，薪集め，弟妹の世話など家族にとって欠くことのできない労働力でもある。

ただ，1951年の開国以来今日まで，初等教育のみならず高等教育は平坦部のタライ地方だけでなく，山岳地帯に至る全国土に広く普及してきたことは事実であり，それが国の発展にとって重要な役割を果たしてきたことは間違いない。

この調査研究は，我々がボランティアとして最初に手がけた校舎の完成が5年を経過したことをきっかけに，その後，地域社会がどのように変化したか，あるいは家庭において重要な労働力であった子供たちはどうなったか，校舎が完成して季節や天気によって休校が重なり気味だったものが，日常に学校へ行くようになったため，その子供たちの役割に変化があったか，また親たちの意識はどう変化したのか。そうした建設以前と建設後の影響などについてまとめることを目的とした。それはまたこうしたボランティアに対する是非を我々自身に問うものでもあり，また我々の奉仕を通してODA（政府間開発援助）の在り方までも考えてみたいという大それた問題提起でもあった。こうした問題意識の中には，ネパールを訪ねるたびに実感するネパール人が他文化を許容し受け入れ，そして変容していくことが，地域住民の暮らしをどう変容させているのか，今後のボランティアの糧としたいという思いがあった。調査地区は次の通りである。マッディマンチャール地方（Madhymaanchal Development Zone）ジャナカプール県（Janakpur）ドラカ郡（Dorakha）ジリ村（Jiri）チェルディング地区（Cherdung）アラン区（Aran）。現地踏査は1990年12月から毎年12月の2

週間を1999年まで小学校建設ボランティアを行った時に合せて実施したものである。

第1節　ドラカ（Dolakha）の人と暮らし

今回の調査報告地域ジリ村のあるジャナカプール県ドラカ郡の面積は214,278 ha，海抜は762 mから7,183 mの広範囲にわたっており，Mclungse（7,183 m），Gsurisankar（7,148 m），Chohha-Bhamare（5,960 m）などヒマラヤ山脈を形成する山々が連なっている。北緯27度28分，東経80度に位置し，気候は熱帯，亜熱帯，冷帯，高山帯と変化に富んでいる。

表1　ドラカ郡の地形分布表（ha）

自然の状態	農　業		牧草地	森	その他	合　計
	耕作地	未耕作地				
ヒマラヤ	52	11	23,294	12,076	39,541	74,974
高い山	10,181	6,666	8,111	59,707	952	85,617
中位の山	19,190	8,771	2,723	22,695	308	53,687
合　計	29,423	15,448	34,128	94,478	40,801	214,278

（資料1）Nepal District Profile.　1999.　P-267

ドラカ郡の面積のうち，耕作地は29,423haとわずか14%に過ぎない。未耕地は15,448haで，うち農業地として利用できるのは44,871haで約20.9%でしかない。保健衛生の向上，乳幼児死亡率の低下などによって，人口が急激に増加する中で，就学を終えた子供たちが村に残って限られた農地を分けて暮らすには限界がある。また当然そうした条件を無視した開墾には収穫量も限られる。山村僻地の貧困を生む原因の一端もここにある。

また，'81年の時点ではドラカ郡の人口は，150,576人であったが，'98年は191,073人にまで増加している。そのうち男女比は男性の出稼ぎなどもあって，女性が僅かではあるが高い。人口増加は世帯数の増加でも読める。しかし平均家族数は'81年から比較すると'98年は減少気味である。これには産児制限，出産計画等の国の政策や就学率の向上などが原因している。例

表 2　ドラカ郡の人口統計表（人）

年と項目	1981人口調査	1991人口調査	1998推定
総人口数	150,576	173,236	191,073
男性	74,910	84,825	93,559
女性	75,666	88,411	97,514
総世帯数	28,848	35,862	39,554
平均家族数	5.2	4.8	4.8
6 歳以上の識字率	17.5	37.8	41.7
人口密度	68.7	79.1	87.2

（資料 2）Nepal District Profile.　1999.　P-268

えば 6 歳以上の就学率も，'81年時17.5%からと比べると '98には41.8%にまで大きく伸びていることからも山村僻地に住む人々の意識向上に教育が大きく影響している。

1）　ジリ村とジレル族

ドラカ郡ジリ村の人口（1981年）は，7,040人（男性3,612，女性3,428）。1998年の推定では7,765人（男性3,984，女性3,781）である。ドラカ郡の中では男性の比率が高い。

また標高 2,500 m のジリ村はネパールの首都カトマンズから約 188 km，北東に位置し，周りを高い山に囲まれた小さい盆地である。

ジリ村は幾つかの少数民族によって形成されているが，その中でも伝統的に中核をなしている「ジレル族はこのジリ盆地とシクリ盆地がそれぞれのキパット地であって，約3,000人程度の少数民族である。彼らはシェルパ族とこの地域最大のスヌワール族との通婚によって発生した民族とされ，仏教徒で文化的にもシェルパ族に近い」と田村真知子（1984年）による報告がある（注 1）。

この村は森にも恵まれていて，広い松の森の中に真紅のシャクナゲ（石楠花），そして種々の草花と多くのハーブが見られる。生業としては本来焼

畑耕作であったろう。現在では雑穀栽培と棚田での水稲栽培が主で，光景としては家畜のブタやニワトリをはじめ水牛，ヤギ，また水稲のあとはトウモロコシ，ジャガイモと小麦畑をあちこちで見かける。稲作の可能標高は2,000 m少しと言われているが，それもひとえに水利だけという状況であり，また田畑への肥料は家畜のフンと堆肥に頼っているのが一般的である。

しかし，何といってもこのジリ村は観光と保養地として知られていて，世界一高いエベレスト（Everest 8,848 m）のベースキャンプまでのトレッキングルートがある。気候の一番良い時期を迎える頃には，山を楽しむ海外からのトレッカーが連日ジリ村を通り，目的地へと徒歩で進む。さらにジリ村の北へゴーリ（Gauri）山があり，それまで山並みが連なっており，ピークのそれぞれにヒンズー教の神の名が付けられている。ここへ住む人も，訪ねる人にもこの山は聖地となっている。

スイスのチューリッヒ（Zurich）やインドのダージリン（Darjeeling）にも匹敵されると称賛されているこの村は，昔からスイス人たちから愛され，その政府からも長く支援されている。

ジリ村のジレル族は仏教徒であるが，その他ヒンズー教や少数だがキリスト教徒もいる。しかしながら，近隣地域最大のスヌワール族と同様にそれぞれ固有信仰をもつ二重信仰でもあり，シャーマンが儀式を行い，またブラーマンを司祭に雇う場合も多い。

教育においては，古くラナ（Rana）時代（1846～1950年）から熱心に取り組まれてきたことが広く知られている。

現在，ドラカ郡の教育開発は7区域に分けられて進められており，第2地区のジリ村には14校がある。ジリ・ハイエル高等学校，ネパール・ボーデング学校，ドゥンゲなど2つの中学校と9つの小学校，2つの英語学校である。

他の村に比べ，教育に対して強い関心を持ち続けてきた伝統と，就学させたいというジリ村の人たちの気持ちは学校数の多さからも理解される。

今回の調査地区のジリ村に関する学術文献は限られており地域社会の今日的経済的社会的全体像が浮かび上がらない。しかしながら，ジリ村を知るために，これまで地域社会の経済的活動の核をなしてきた生活協同組合が1997～1998年にまとめた「フレンドシップ預貯金と貸付金」の5周年記念誌（注2）がある。

この協同組合は1992年3月に設立された。目的はこの地域（ジリ村）がエベレストの登山口として多くの観光客が通る。それを活かすのが村の発展と考えることは当然のことながら，その前に政治，社会，経済，教育，文化などの面における財政的支援体制の強化が重要だと考えこの組合を設立することとなった。1999年12月現在の加入者は約70%に及んでいる。

この記念誌の中で組合長のゴクル・ドッ・カルキ（Gokul Dhoj Karki）氏は述べている。

> 「国民の経済レベルと文化レベルが上がらない限り，国のレベルは上がらない。弱い人たちが，お互い助け合い協力し合って前向きに働けば暮らしのレベルが上がっていくことは明白である。恵まれた環境をつくるため，国民が貯金をする習慣をはじめ，経済活動と技術習得のための支援ローンの基金として「フレンドシップ」が生まれた」。

この「フレンドシップ協同組合」のガイドブックによると，

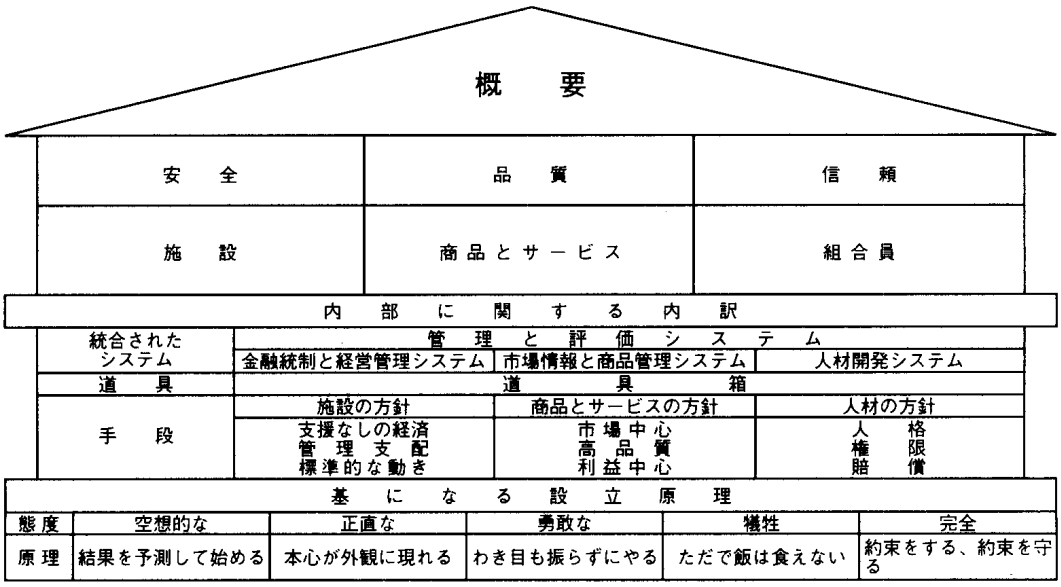
①フレンドシップの目標は，a）貯金の習慣をつける。b）古くて現実的でないこれまでの習慣を改める。c）国民の知識と教育レベルを上げる。d）メンバーの経済的支援をするためには，多くの人々がローンの制度を利用する。e）組合員同士の協力を高める。f）社会のいろいろな環境開発・活動に参加する。g）経済活動のある環境をつくる。

すでにネパール国内には経済支援のローン制度が普及していて，それぞれの特徴を持って活動しているが，このジリ村の「フレンドシップ」の特徴は，経済支援だけでなく教育と福祉に重点を置いている。

「フレンドシップ」の活動はジリ村の他，ドラカ郡のマリ（Mali）村でも

行われているが，そこでは貯金に対する魅力と大切さをまだ理解していない人が多く加入率も低い。そこでは少しでも貯金することと，誰でも組合に参加できるということをもっと情宣するのが目標となっている。そのために“みんなが一人のために，一人がみんなのために”というモットーをかかげて前へ進んでいる。また，②組合員になるための条件は，a)「フレンドシップ」の活動地域に住んでいる16才以上の人。b)「フレンドシップ」の政策を理解し，最低1株以上持っている人。現在ジリ村では106人の男子メンバーと74人の女子メンバーがいる。これ以外にも34人の特別子供メンバーがいる。③さらに貯金計画は，a）月々貯金50 Rs。b）毎日貯金5～200 Rs。c）子供貯金25 Rs。d）期日設定の定期貯金，積立付貯金に年間利息10%，指定貯金は利息12%。そして④利用制度は，他の会社，または組織より低い利息でメンバーの生産活動計画，例えば農業・酪農・商売などの支援のため最大30,000 Rsまでローンを借りることができる。10,000 Rsまでのローンに利息15%，10,000 Rs以上に17%利息がつく。⑤メンバーのために貯金とローンの知識を高めて，国内・外関係の組織と，会議・セミ

図1 フレンドシップ預貯金と貸付金の協同組合システム



（資料3）5周年記念号フレンドシップ預貯金と貸付金の生活協同組合編出（松田實訳）p 50　1997

ナー・教育・訪問などを行う。

⑥委員会に，いろいろな活動をスムースに行うため，組織の中にローン委員会・教育委員会・文化委員会・奨学金制度委員会を設ける。⑦サービスは，22の支店で大人向け教育事業を行い，メンバーの子供に奨学金を出す。さらに緊急の場合，病気の治療のため，2,000 Rs 出すことができる。この制度がスタートした1992年以来ジリ村では450人が読み書きができるようになったとも記念誌で報告されている。

さらに，その記念誌の中で「いろいろな経験と思い出」と題して，イショリ・ニョパネ（Ishori Neupane）氏の思いが語られている。

「世界の中でもネパールは貧しい国の一つだと言われている。それはこれまで人々が将来のことを考えず生きてきたことがその原因ではないかと考える。勉強・商売・政治など，何事も将来を考えなければならない。しかし，今の若者たちは，人生は生きている時だけのためで，生きている間を楽しめばそれでよいと考えて，無駄遣いをしている。その人たちは無駄遣いといっしょに人生も無駄にしていることには気づいていない。「フレンドシップ」の運動と活動は，ジリ村とそのまわりの村に住んでいる人々の目を開いてくれた。お金を集める。お金が儲かる。そしてお金になるという目的で宝くじやさまざまな流行物がジリ村にもやってきたが，一面ではそれは将来に結びつくものではなく，遊びだけの世界で終わってしまったものもある。

しかし，貯金の大切さが理解され，明日のためという考え方が生まれてきた。少なくても貯金すれば明日の困った時に助かることが皆に理解されてきた。

また明日のためだけではなく，現在でも，経済的な問題で困っている人たちに少しでも役に立つように「フレンドシップ」が支援してくれたことは，大事な明日の目的につながる。自分の足で立つことを続けるために，「フレンドシップ」の活動は必要である」と述べている。

しかし，村人の自立心を高めてきた「フレンドシップ」にも今だに30%

の未加入や反対意見の人たちもいる。

未加入者のA氏（男性）は，48歳，妻と子供3人の5人家族。48年間このジリ村に住んでいる。親もここに居住し，商業（日用雑貨販売）を営み，生計を立てている。

彼の加入しない理由は，金銭の問題に対する個人的な考え方や，組合運営に対する信用性，そして加入者への信頼性に不安があるため，これまで入っていないが，将来は加入したい希望もあるという。

また，B氏（女性）は，36歳，夫（45歳）と子供4人の6人家族。預貯金するだけの経済的余裕がまだない。いずれ加入はしたいが，加入の時期はわからないという。

さらに，C氏（男性）は，60歳，妻と子供1人。長男，次男はカトマンズで生活している。現在はまだ加入していないが，いつか加入組合員の意見を参考として加入したい。

このように未加入者は，宗教や価値観の違いからくる組合やリーダーシップへの信頼などもあるが，多くは金銭に対する個人的な価値観によるもの，あるいは単に現在の暮らしに余裕がない，ということが原因しているように感じられた。

このように70%の世帯が「フレンドシップ」に加入し，協同で地域社会の発展と個人の成長に努力する風土を身につけたのはジリ村の自然の厳しさ，宗教観，いろいろと関連性はあるが，エベレストの登山口に近く，先進国の文化を開国と同時に吸収してきたことと無縁ではない。そして，少数民族でありながら彼らが誇り高いのは教育熱心であり，高い学歴を身につけた者，地方議会，国会議員の輩出など，その教育を背景に高い社会的地位にあるものの存在がある。さらに，ジレル族の教育について，シュマン・ジレル氏は，その著（注3）の中で

「20年前までは，ジリ村の人たちは90%以上が教育を受けていなかったので，読み書きができなかった。しかし，現在はこの村には多くの小学校や中学校が建設され教育を受けることができるようになった。

したがって教育を受けた人たちが次第に増加し医者，技師，教員などの職業に就いている。しかし，それでもまだジレル族の人たちの多くは貧困生活を過ごしている。」

1990年には，高等学校を卒業したジリ村のジレル族の人たちは100人以上にも及び，その中の15%が女子であった。そして，50人以上は大学へ進学し教育，医療，農学，理工などを勉学し大学を卒業して仕事に就職している。なかでも一人の女性は大学院を卒業し当時USSR（旧ソ連）から博士号を取り，医者になったという例がある。

今でこそ教育熱心であるが，それまでジレル族の教育が遅れていた理由の一つは，基本的には1951年までネパール自身が開国されておらず，教育の必要性を地域内部からも，外部社会（国外を含めて）からも感じることもなかったことがあるが，政治的にも山岳地域の開発が遅れたことによる貧困と住む人々の意識にあった。

2）　出稼ぎする人々

今回一連の調査（1998.8/.1999.8/.2000.3）の中では，教育熱心で積極的に国内外へ出稼ぎに出ている人たちも多いというジリ村出身の人たちへの聞き取りを行った。

A氏（男性）は，36歳，妻と子供3人の5人家族。ジリ村で小さなホテル経営（15ベッド）。彼は1992年から7年間ジリ村の村長を務め，1996年より村の教育関係のマネージメントも務めている。村長及び教育関係マネージャーは，いずれもボランティアのため給料，謝礼などはない。しかし，それぞれの会議が開催される場合だけ，1カ月の手当てとして1,000 Rsを受け取っている。彼の出稼ぎ経験は，首都カトマンズへ述べ約10年間。

「カトマンズからジリまでの主要交通機関はバスで，運賃は現在が，150 Rs。10年前は80 Rsだった。これから10年先は300 Rsくらいに上昇するかもしれない。それなのにこのままでは村の人々はいっそう貧困に陥り生活

は困難を強いられることになると思っている。すでに若者たちはサウジアラビア，インド，シンガポールなど外国へも出稼ぎに出ている者もいるが，それでも村の暮らしは，ネパールの都会と比べて物資も少なく物価は高い。またインド，サウジアラビアから輸入せざるをえない重油は山村僻地でさえ今では生活必需品のため，人々にとっては負担となっている。今後も貧困の生活が続くと考えられる。かって炊事をはじめ必要な火力はわずかなもので，そのエネルギー源だった薪や家畜のフンは今では重油にとってかわっている。山はふえる人口とそれによる開墾によって火力とするほどの薪はなく，やせた田畑を捨てて都会に出る村からは家畜も減少している。

こうした状況を改善する為にも，村に仕事が必要だが，進出してくる企業もないうえに教育を受けた村人たちは現金収入を求めて都会に出る。

我々は，この村が自立するために真剣に対策を考えなければならないし，リーダーシップのある政治家を選ばなくてはいけない。もちろん政府もこの村の経済状況について，真剣に対策を講じて欲しい」と言う。政治への期待はこの村だけでなくネパール全体で大きい。村人からの聞き取りにより，村の物価を次のようにまとめた。（表3-1，表3-2　参照）

5年前から物価は急激に高騰している。B氏は，42歳（妻と子供2人），村でトレッカー（観光登山）や行商人相手のレストラン経営。彼はカトマンズだけでなく海外へも出稼ぎ経験をもっている。

「ネパールではほとんどのものをインドをはじめ輸入しなければなりません。また，物価がとても高くなっています。現在，ネパールではインフレが11%です。ほとんどの物が高くなっているのは輸入税がどんどん高くなっているからで，生活が苦しくなる一方です。現在も高いですが，今後もますます物価が高くなることは確実です」と言う。海がなく，山岳地帯を広くもつネパールは物流コストが非常に高く，その分だけ物価にはね返っている。

聞き取りを集計した結果でも，日常必需品である食用油が20年前に比べて約12倍，塩が8.5倍，薪が約7倍にもはね上がり，市民の生活はますます

表 3-1　村の物価（昔と今）

品物名	量	現　在	5 年前	10年前	20年前
食用油	1 リットル	120 Rs	40 Rs	20 Rs	10Rs
チーズ	1 kg	400Rs	180 Rs	100 Rs	60 Rs
塩	1 kg	8Rs	3 Rs	1 Rs	50 paisa
お米	1 kg	30Rs	18 Rs	10 Rs	6 Rs
ローソク	1 本	5 Rs	3Rs	1 Rs	50 paisa
重油	1 リットル	16 Rs	10 Rs	7 Rs	3 Rs
自動車	1 台	50万 Rs	40万 Rs	30万 Rs	25万 Rs
薪	1 kg	6 Rs	3 Rs	1 Rs	25 paisa

（1998年 8 月）　聞き取りによる（54人からの平均値）

表 3-2　村のニーズ（昔と今）%

	現 在	過 去
電　気	6.0	36.2
水　道	18.0	12.8
道　路	0.0	2.1
病　院	0.0	4.3
学　校	54.0	12.8
教　育	2.0	2.1
その他	2.0	8.5
無回答	18.0	21.3
合　計	100.0	100.0

（1998年 8 月）同上

困窮の度合いを高めているのが現状である。その他の品物を見ても，2～6.5倍に達するほどである。「今後の課題としては，第一に政治を安定させ，生活物価を先ず安定させなければならないが，そのためには，政府の方針を一貫させることにある」と彼は言う。しかしながら，政治はネパール会議派と共産党とが共に単独政権とはなりえず，政府の安定は早急には期待

できないのが現状でもある。そのため海外からのODAをはじめ民間投資も順調に伸びず，インフラの整備は遅れ，政権に左右された目先の投資に追われていることに山村僻地の人たちは困惑している。

安定した政治を求め，さらに海外からの投資を招いて，国民に仕事の場を与え，「失業率40%以上」という異常な高さを，できる限り早期に改善しなければならないと考えている人は多い。

彼は「村の雇用を促進する為には，都会だけでなく地方のインフラ（社会構造基盤）も整え，ジリ村の地形的，歴史的背景に支えられている観光に力を注ぎ，保養地として村を飛躍的に伸ばしていく必要性が急務」と強調した。

また，ジリ村の子供，及びカトマンズに出稼ぎしている子供の保護者への聞き取り調査（1998.12）では，彼らの子供の多くは学校を出るとカトマンズに出稼ぎに行っているので，「ぜひ我々の子供たちにも会ってもらいたい」と言う。

彼らは，自分の子供たちがどうしているのかその安否を知りたくてたまらないのだと言う。だが保護者の彼らは文盲で手紙を書くことも読むこともできない。村の知人がカトマンズに出て偶然子供と出会い，その知人から子供の様子を伝聞してもらう以外に，彼らには子供たちと連絡をとる方法はない。

しかし，今回の調査では保護者からの依頼があっても，カトマンズでその子供たちを捜し求めてインタビューすることはかなり難しかった。先ず親たち自身が子供たちの住所や場所を知らないからだ。それでもようやく5名の男女の聞き取りを行うことができた。

こうした状況であっても，親たちにとっては「カトマンズで仕事ができるのは外国に行くよりまだ良い方だ」と口を揃える。また，「夫も出稼ぎに行っている。年に一度帰ってきてくれれば良い方だ」と言う。村には老人，妻，幼児が残され，彼らは細々と農業を続けながら，夫や子供たちからの仕送りを当てにした生活を続けているが，それも定期的に届けられること

もなく，父親や子供が村に戻らないかぎり現金を手にすることはない。

義務教育が終わり成長した子供たちの大半は，出稼ぎで家を離れるのが普通で，この教育熱心なジリ村でも村にある高等教育を受けられるのは，経済的にも恵まれたごく一部に過ぎない。ましてやカトマンズまで出て進学するとなると，さらに限られた家庭になる。

カトマンズで，我々が探し求めてやっと出会うことができたジリ村出身の若者たちに聞いてみた。

1）　男（23）レストラン勤務

村を出てから15年，カトマンズで職を転々としながら今のレストランにいる。仕事は何でもやる。収入は1カ月 1,000 Rs で，あとチップだけだが普通の給料だと思っている。寝泊まりはレストランの裏の方で他の人たちと相部屋で食費は払っていない。

私が村にいた時は，アラン区には小学校がなくて，通学したい人は遠くの村の学校へ行っていた。ジリ村に同じ世代の子供は1人か2人くらいだったと思う。私は村を出る時は字も書けなかったが，カトマンズに来て仲間たちから習って，今では困ることはないが，それでも学校へ行った人に比べると不自由で新聞などは今でも少しだけしか分からない。アラン区に学校ができたということを聞いて，非常にうれしい。

とにかくカトマンズに出て働くためには新聞くらいは読めなくてはならないし，字が書けないとレストランでも勤められない。アラン区の子供たちが学校へ行けるようになって，これからはカトマンズに出てきてもいい仕事につけるようになるだろう。

ジリ村に学校ができて子供たちが家の手伝いをしなくなるというようなことはない。その分だけ朝早くやればいい。私はアランに帰る時は少しのお金とお土産に服などを買って帰るが，それは年に一度だけ。休みもないけど歩いて帰るのは遠いし，バスは料金がたかい。

2）　女（18）ホテル勤務

5年前にカトマンズに出てきた。知り合いにこのホテルを紹介されて，

それ以来働いている。部屋の掃除やいろいろ雑用だけ。給料は月々500 Rsとチップ。寝泊まりはホテルの中に部屋があり，他の人たちと一緒。私がジリ村にいた時は学校がなくて，遠くの学校へ時々行くことがあったので，字を書いたり読んだりすることはできましたが，カトマンズで新聞を読む時は不自由だった。ジリ村では女の子は学校に行くことを周囲の大人たちはあまり必要だと思っていない。農作業や家事を手伝う方が誉められた。それに学校が遠くて女の子には無理，危険だとも言われていた。しかし今では学校も近くにできましたから，多くの女の子が通えるようになって喜んでいるということを聞いた。

私も水くみや手伝いをしていたが，学校へ通うような日でも朝早く起きて手伝っていた。親が反対するなら学校へは行かないのでしょうが，今は親も賛成していると思う。学校に行くには月謝が必要だから，親や上の子が働きに出て仕送りをするのが普通。お金は年に一度帰る時に持って帰る。

3）男（21）レストラン勤務

ジリ村を出てから5年間ここで働いている。仕事は何でもやります。給料は月に1,000 Rsとチップ。ジリ村に学校がなかった頃だし，遠くまで通うこともできなかった。家の仕事（農業）を手伝っていましたが，知り合いの紹介で出てきた。カトマンズに出て来て人と話すことはできても文字を書いたり読んだりすることはできずに困った。今では少しは読めるようになったが書くのは苦手。ジリ村に当時学校があれば当然行っていたかもしれないが分からない。学校がなかった時代は誰も行ってなかったからあまり考えたことがなかった。村では字が書けなくても話ができれば不自由はなかった。カトマンズに来てから本当に困ったし，少し恥かしかった。今ではジリ村の子供たちは皆学校へ行っているから家の手伝いができなくて困っているかもしれない。しかし，卒業して働きに出る時条件がいいと思う。私は年に一度だけ休みをもらってジリ村に帰る。その時少しお金とお土産を持っていく。

4)　女（16）家政婦

1年半前にジリ村を出てこの家の掃除，洗濯，食事作りの手伝いなどをやっている。給料はまだない。ジリ村では学校はできていたが私は行かなかった。今（カトマンズ）は近くに学校があるので暇な時に行けるが，この家の人がいろいろ教えてくれるので親は喜んでいる。しかしできたら学校へ行って字の読み書きを習いたい。村にいる時は家計が苦しくて朝から洗濯，炊事，掃除の手伝いと畑仕事などをやっていた。ジリ村に帰るのはまだ分からない。

5)　男（24）旅行会社（日本語，英語通訳）

カトマンズでの生活は3年。それまでジリ村で観光客の案内と通訳をしていた。収入は月々 3,800 Rs とチップ。

当時ジリ村には学校はなかったが，外国人の観光客が多いので，その人たちから日本語を習ったし，ネパール語の字も読み書きできるようになった。

カトマンズに出てきてから日本語の専門学校にも通った。自分の部屋は近くに借りている。月々 300 Rs。そこからあちこちのホテルや旅行会社から声がかかるのを待って仕事をするが，だいたい常連の人たちの通訳が多い。今ではジリ村に小学校ができて皆通っているが，早く高等学校が欲しい。やはり高校を出ないと都会ではいい仕事につけない。都会に住んでいると月謝だけだから高等学校へも望めば誰でもいけるが，村から出て進学するには貧しい人には無理。やはり豊かになるためには誰もが教育を受けたいし，それが家族の望みでもある。ジリ村で働くところは観光案内と小さなホテルや食堂だけで，それはそこの家族だけで十分，と言う。

さらに海外へ出稼ぎした者たちへ聞いてみた。

1)　男（39）サウジアラビア。仲介する人がいて，6年前（1993）から出稼ぎに出て，97年に帰国した。収入は年間 7,000 Rs の契約だったが，旅費，宿泊と食費は無料だったので，当時としては条件は悪くないと

思っていた。向こうでの休暇はほとんどなかったが，帰国してからは貯めたお金で洋品関係の商売を始めた。昔と比べると暮らしは楽になったが，もう二度と国外への出稼ぎには行きたいとは思わない。やはり村の人たちが出稼ぎばかりでは村の発展にならない。貯めたお金で村をどう発展させるか，みんなで考えなければならない。

2）男（48）インド。16年前に出て12年間ポーター（荷物運び）として働いた。当時収入は月に2,000 Rsだったが仕事は暑くて大変だった。お金は貯めることができた。それで村に帰って今は楽しく暮らしているが，また行きたいとは思わない。子供たちにも国外へ出て稼ぐことは反対。カトマンズにもあまりいい仕事はないが，それでもネパールにいたほうがいい。今は48歳で年寄りなので，昔のような仕事はできないが，ジリ村で仕事がふえて皆が出なくていいように発展して欲しいと思っている。

3）男（43）インド。出たのはわからないが帰ったのは12年前。インドではポーターとして働き，月に1,000 Rsだったと思う。向こうではあまりお金も貯まらず，村に戻って，思ったような楽な暮らしもできなかった。やはりジリ村で頑張った方がいい。もうインドへ働きに行く気もないし，ジリ村で皆が働かなければ村の発展はない。しかし，働くといっても，農業以外にはない。

4）男（26）サウジアラビア。1993年に出て95年までの2年間。個人の家の手伝いのような仕事で，月に7,000 Rsくらいもらった。休暇も2年間で45日くらいもらったので，サウジアラビアにいた頃は比較的楽しく暮らした。帰国後は商売でもしようと思っていたが，いい商売が見つからない。しかし，自分の生まれた村に戻れてこんなに嬉しいことはないので，村で何とか仕事を見つけたいと思う。しかし，雇ってくれる会社（仕事）を見つけるのは無理。やはり村に仕事がなければ，この村から人はいなくなる。

5）男（25）チベット。1995年に出て98年に帰国した。力仕事もしましたが事務も手伝った。収入は2年間で100,000 Rsもらったが，一日に12

時間働いた。休みは2年間で45日ほどもらった。この村は農業はあるが，土地が少ないので家族全員が食べていくには無理があるから，チベットまで行った。あそこはここよりも大きな観光地でいろいろ勉強にもなった。また機会があったらチベットに出て働きたいと思う。本当はこの村ももっと観光に力を入れて一年中仕事があって，若者が村を出なくてもいいように発展させなければいけないと思うが，このままだと仕事は絶対にない。この村に戻ってからいろいろ考えるようになった。学校は必要だ，出て行くばかりでは村の発展にはならない。

また，ジリ村出身で政治活動に執いている者はジリ村をどう思っているのか聞いてみた。

A氏（男性）54歳（妻と子供3人），国会議員，カトマンズ郊外在住。両親がジリ村出身。

「村に校舎が整備された学校が必要であることは充分に承知している。しかし政府としては予算が不足していて，山村僻地の学校建設まで行き届かないのが現状である。海外からのボランティアによって学校が建てられることに感謝している。子供たちが通学することで，言葉や知識を身につけるだろう。また通学することで，これまでの家族の役割が少しは変わると思うが，家事や家畜への手伝いには影響しないと思う。それよりも村から文盲がなくなり，子供たちと家族だけでなく村そのものの将来が大きく変わる。教育が国の成長の基本である」と言う。

B氏（男性），58歳（独身），元国会議員，カトマンズに在住，両親がジリ村出身。

「学校がない，ということは，教育を受けさせてやれないわけで，文字が読めない，書けないということだ。せめて義務教育だけでも受けられる施設が必要なのだが，それすら今のネパールの財政ではできない。その中で，海外からのボランティア活動として学校建設の支援，援助を受け，非常にありがたいことである。村で教育を受け，たとえ村を出て働くにしても本人そのものの人生にとっては大きな違いで，教育を受けているかどうかで

本人の雇用条件が全く違ってくる。また働きに出た人たちにとっても稼ぐわりにはカトマンズは物価も高く，自分の生活に追われて村への仕送りは大変だけれども，都会に出た人ほど就学の必要性を強く感じている。それにしても，出稼ぎだけが村の現金収入の道という現状を早く解決して，この土地の条件を生かした就業の場を村に作らなくてはならない」。

ジリ村に限らず，山岳地帯出身の政治家はNGOをはじめ民間ボランティアに対して，政治家は自分自身の選挙区地域へ学校建設を強く希望する。それは地域有権者の要求として学校建設の優先順位が非常に高いからでもある。

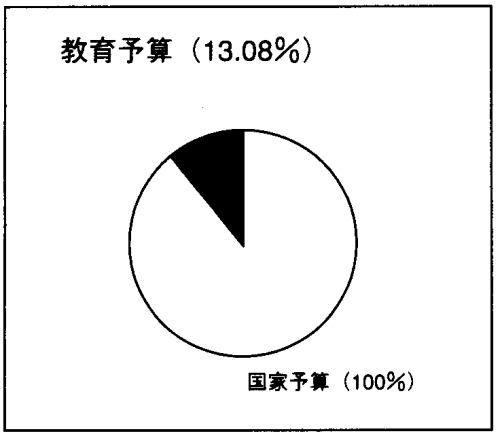
第2節　ドラカの教育

1997年の政府発表によると，教育関係の国家予算は8,11,49,22,000 Rsで，総国家予算の13.08%を占める。1 Rsは約2円（1999. 8）であるから，日本円に換算すると約16億円。ちなみに総国家予算を日本円に換算すると，約120億円になる。

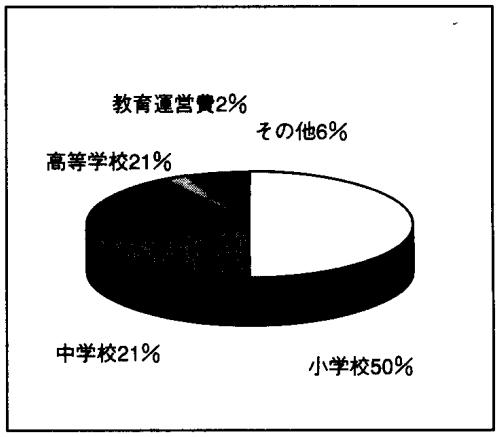
ジリ村のあるドラカ郡の教育の現状を公立と私立比較で見ると，義務教育である公立の小学校は75%だが，中学校は18%と極端に減少している。高等学校は7%とさらに減少する。一方，私立学校では，小学校50%で半数以下の比率。徐々に小学校は増えつつあるが，それでも公立と比較すると比率は極端に低い。逆に公立に比べて，中学校は29%，高等学校は21%と，比率的に高い。

経済的に余裕のある家庭では，全国一斉に行われる高等学校最後の難関，SLC（高校卒業検定試験）に合格するために，カリキュラムの充実した私立学校を選択する傾向が強い。SLCをパスした生徒は，やがてネパールの政治・行政・経済など様々な分野での中枢を担うことを考えれば，試験合格のための教育が効率的に行われる私立学校はまさにエリートを養成する場所といえる。ネパール全体において，識字率は男子が68%，女性は半分のわずか32%にすぎない。ドラカ郡においては男性が74%と全国平均より高

表 4　国家予算と教育予算率 '98



教育関係予算率 ' 98



（資料 4 ）Educational Statistics of Nepal 1997. p. 134

表 5　教育費

	1996年	1997年	1998年
小 学 校	2,613 Rs	3,068 Rs	2,893 Rs
中 学 校	1,853 Rs	2,498 Rs	1,727 Rs
高等学校	15,757 Rs	15,110 Rs	35,686 Rs

（資料 5 ）Dolakha Declaration. 1998. pp. 12–13

いが，女性については25.8%で男性との格差は全国平均より低い。

学校の教員の数は，小学校は全国平均で 1 校当たり3.9人，中学校は3.4人，高等学校においては約 5 人である。ドラカ郡においては，小学校が約3.4人，中学校が2.9人，高校が3.9人なので，全国平均と比べるとやや少ない。

教員 1 人当たりの生徒数で見ると，全国では小学校が37.8人，中学校が40.1人，高等学校が20.8人。ドラカ郡においては，小学校で40.7人と，全国平均より2.9人高い。中学校では39.8人で全国平均より若干低くなる。高等学校で20.7人と，これは全国とほぼ同じ水準である。

私立の場合，1 校当たりの全国の生徒数を見ると，小学校，中学校，高等学校共に，公立学校と比較して，人数が極端に少ない。ドラカ郡においても同様で，公立に比べると少人数教育を行っていることがわかる。

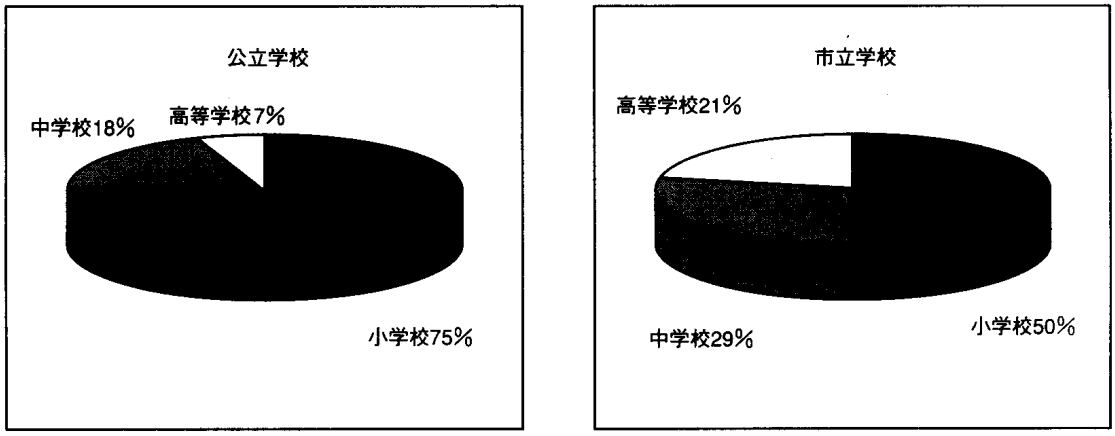
1 校当たりの教員数の全国平均を見ると，公立学校と私立との差はあま

りない。教員１人当たりの生徒数は私立の方が公立学校より少ない。教員１人当たりの生徒数が少ないだけ。結果としてSLC合格率は私立の方が高くなっている。

山岳地帯における教員数は，'92年の2,325人で全体に占める割合は9.70%，'96年には2,835人で，全体に占める割合は10.20%と，0.5ポイント上昇している。

現状のネパールでは，免許を持つ教員は，全体の40%強に過ぎないといわれている。教壇に立ち，生徒の教育・指導にあたっている教員の６割～７割は資格のない教員（補助教員）なのである。彼らはいずれ教員免許を取得することで，正規の教員として認められることになるが，それは短大，

表６　1997年 学年別公立学校と私立学校率



（資料６）Educational Statistics of Nepal. 1997. p. 13

表７　公立学校と私立学校における学校別学生，教員数（人）

		学校数						
		小学校		中学校		高等学校		合計
ネパール全体	公立	23,284	71%	6,062	19%	3,322	10%	32,668
	私立	4,004	48%	2,729	33%	1,602	19%	8,335
ドラカ郡	公立	317	78%	60	15%	29	7%	406
	私立	12	26%	24	51%	11	23%	47

1997年

表7　公立学校と私立学校における学校別学生，教員数（人）

		学生数								
		小学校			中学校			高等学校		
		合計	女性		合計	女性		合計	女性	
ネパール全体	公立	3,460,756	1,439,663	42%	828,767	320,162	39%	344,034	129,028	38%
	私立	311,813	126,836	41%	169,384	62,102	37%	71,010	25,173	35%
ドラカ郡	公立	43,258	14,855	34%	7,004	2,211	32%	2,335	687	29%
	私立	134	50	37%	687	168	24%	260	68	26%

		教員数								
		小学校			中学校			高等学校		
		合計	女性		合計	女性		合計	女性	
ネパール全体	公立	91,464	42,039	46%	20,641	6,411	31%	16,494	7,743	47%
	私立	14,314	1,685	12%	6,448	1,338	21%	5,421	1,702	31%
ドラカ郡	公立	1,063	663	62%	176	60	34%	113	70	62%
	私立	46	5	11%	40	5	13%	14	6	43%

（資料7）Educational Statistics of Nepal 1997. pp. 3–7

表8　地域別による小学校の教員（ネパール中部地区）（人）

	1992	1993	1994	1995	1996
山岳地帯	2,325	2,382	2,409	2,540	2,835
丘陵地帯	6,609	6,833	6,613	6,955	7,584
盆地地域	7,746	8,179	8,463	8,476	8,855
カトマンズ区域	7,289	7,665	7,792	8,048	8,533
合計	23,969	25,059	25,277	26,019	27,807
ネパール全域	77,948	79,590	81,544	82,645	89,378

（資料8）Educational Statistics of Nepal..（1992–1996）. p. 7

専門学校，高等学校を卒業しても，すぐに免許が与えられるのではなく，こうした一定の「見習い期間」が必要だからでもある。

さらに女子で免許資格を持つ教員は少なく，女子教員は全体の2割程度である。それは現在でもネパール全体において高等教育を受ける女性の割合は少ないことが，教職においても同様の傾向として現れている。

小学校へは高い入学比率を示すが，男女とも初等中学校への進学は半数以下に減少する。高等中学校への進学となるとさらに半減している。進学を断念せざるを得ない第一の問題は，家計的なものである。

A君（男子，15歳）ジリ村公立中学校在学中。

「進学は卒業試験も難しいが現在の家計を考えるともっと難しい，クラスの中で順調に進学できるのは4人に1人だ。進級できなければ，あきらめて仕事をしようと思う。ジリ村では皆なそうしているから都会に出て働く

表9　入学比率（%）

実質入学比率（%）	小　学　校 (1–5)	初等中学校 (6–8)	高等中学校 (9–10)	合　計 (1–10)
合　　計	69.4	26.8	18.2	48.2
女　　子	58.7	21.0	13.9	40.1
男　　子	79.4	32.1	22.1	55.8

（資料9）Educational Statistics of Nepal.（1992–1996）, p. 2

ことは辛いことではない。弟たちが進学できるように自分は働いてもいい」と言う。経済的にかなりの余裕がなければ村内の高等教育だけでなく都会に出ての，進学は断念せざるを得ないのが現状である。

1.　就学の実態

1)　チェルドン小学校（Cherdung Primary School）での調査（1998年12月）

面接調査した児童は，3年生7名（男子4名，女子3名），2年生13名（男子5名，女子8名），1年生19名（男子15名，女子4名）。合わせて男子生徒24名，女子生徒15名の全校生徒39名（地区内の就学率100%）に対する調査結果をまとめてみた。

山村僻地ジリ村アラン地区の児童39名でも，男子と女子では考え方，受け取り方なども違う。それぞれ，校舎建設の完成以前と以後では彼らの意識にどういう変化が見られるのか。保護者の意見（男6人・女8人）（表11～13）生徒自身の率直な意見（表14-1～14-2）を聞いた。

その前に教員はどうだったか，A教員は校舎建設後に採用されているが，当地区から少し離れた村の出身者である。

写真1　チェルドン小学校校庭にて。1998年12月撮影。

A教員（独身女性），23歳，教員歴3年（免許あり）。給料年30,000 Rs（日本円60,000円），担当科目は英語，ネパール語。

校舎が完成してからは，就学生徒も多くなり生徒自身が非常に元気で明るくなった。村中からいろんな子供が集まっているということもあって，学校に子供が増えたことも原因している。また授業も雨や寒さに影響を受けずにできることが学力を高めていったし，進学希望も増えてきた。しかし，「生徒たちへの教育施設は一応整ったが，今後生徒たちがさらに増加することは十分に予想されます。そのため午前と午後に分けて授業をやらなくてはならないと考えている。この村の子供たちのために学校が建設されたが，就学希望生徒はまだいます。今後もボランティアで校舎の増築は考えていただけるのか」「私はこのジリ村アラン区を含めて，教育の町，学園の町にしたいし，子供たちが可愛いくてたまらない。一生懸命勉強してくれる。子供たちの目が輝いている。それを見るのが教員としての私の生き甲斐でもある」と語る。

生徒には授業だけでなく，年3回（1～3学期）の簡単な試験が行われるが，進級試験に，パスしなければ留年することになり，そのまま退学というケースとなることもある。

また，ネパール国内でも学内行事の中に身体検査が取入れられ保健衛生にも気を配られるようになったこと。さらに学校と，地域との交流イベント（運動会，文化祭など），保護者会などの開催も行われている。これは学校・保護者・生徒の三者の関係を強め，さらには地域ぐるみで協力して学校運営に関っていこうとする姿勢が現れ始めたこと。さらに地域だけでなく，国や地方自治体の医療問題，環境問題，経済的な諸政策が，学校運営にも反映され始めているといえる。

教室の椅子に腰をかけ，教員の言葉に耳を傾ける。机の上で鉛筆を走らせ，字を書き，絵を描き，起立して教科書を読む，知識がふえることで子供たちの期待は膨らむ。休み時間には友だちと戯れ，いたずらっ子が駆けずり回っての歓喜する子供たちの姿がある。子供たちにとって学校とは，勉

強できる喜びとともに，そこに集った多くの仲間と遊び，触れ合える場所なのである。また，子供と学校を地域社会の連帯の核として新しい時代に対応して行こうとする現実が見える。学校建設というのは，そういう意味で地域振興の柱であるし，地域社会の意識そのものを大きく変えていく起爆剤でもある。

またB教員（独身男性）26歳，教員歴6年（免許なし），給与年12,000 Rs（日本円で24,000円）担当科目，数学，社会，当地区生まれ，『生徒の健康や

表10　チェルドン小学校の年間行事表

ネパール西暦月日	行　　事	日本暦月日
2055年1月15日	入学式	4月28日
2055年1月16日	授業開始	4月29日
2055年2月25日～31日	1学期の試験	6月8日～14日
2055年3月1日～4月23日	夏休暇	7月15日～8月8日
2055年4月24日	授業開始	8月9日
2055年5月4日	「子供の日」（休校）	8月20日
2055年5月24日～6月2日	2学期の試験	9月9日～18日
2055年6月5日～19日	「ダサインのお祭り」（休校）	9月21日～10月5日
2055年6月20日	授業開始	10月6日
2055年7月2日～5日	「ティハルのお祭り」（休校）	10月19日～22日
2055年7月23日	「憲法記念日」（休校）	11月9日
2055年9月5日	3学期の試験開始	12月20日
2055年9月14日	「国王誕生日」（休校）	12月29日
2055年9月30日	この日までに試験結果発表	1月14日
2055年10月8日	「勉学の神様の日」（休校）	1月22日
2055年10月16日	「殉教者記念日」（休校）	1月30日
2055年11月7日	民主主義記念で休校	2月19日
2055年11月12日	教育の日（保護者会の意）で休校	2月24日

（教員 R.Kadaka 作成）1998. 12

交友の様子，登校状況』について，新しい校舎の完成以前と以後を比較して尋ねてみた。

校舎の完成以前は「こんなに友達と遊び，また勉強することもなく，今と比べると非常に就学に対して積極的でなく，どちらかというと暗かった」と言う。理由は「雨のときや寒いときは授業そのものが中止だった」「ときには冬の寒い時でも外で勉強させた」「毎日勉強したければ，遠くの村の学校に行かなければならなかった」からだと答えた。標高2,500 m，エベレストのベースキャンプへの登り口のジリ村は戸外では勉強のできる環境ではない。

友達関係にしても，完成以前は「こんなに村中から毎日集まることがなかったから，あまり友達もいなかった」が，完成後は「就学生徒も多くなり，それだけ多くの友達ができた」と言う。地元に校舎のある学校ができて，これまで天候に左右された生徒たちが毎日家を出て学校に集まるようになったからである。生徒が集まれば，多彩な学校行事も開催できる。学校行事が友達をさらに多くし，村人までも巻き込んで地域社会の活性化の核となっていった。

完成以前は，隣村の学校などへ「時々行っていた生徒もいた」が，完成後は「毎日きている」。しかしこの質問には，生徒，保護者など立場によって回答に多少の変化がでている。

授業が天候に左右されないですむ校舎の完成は，子供たちに登校という規律を与えただけでなく，教員にとっても授業に計画性を与えた。そのために教員自らカリキュラムを組み，そのための勉学に励まなければならないことになったが，それだけ教員の意識を高めていった。彼らは子供たちが何を望み，保護者は何を期待しているのかを把握しなければならなくなった。

さらに，教員の指導，助言が子供たちだけでなく地域社会にも大きな影響を与えることになり教員の村での発言力も高くなっていった。

一方，子供たちは毎日通学することになっても従来通り家庭における労

表11　子供たちの家庭の手伝いについて（保護者）

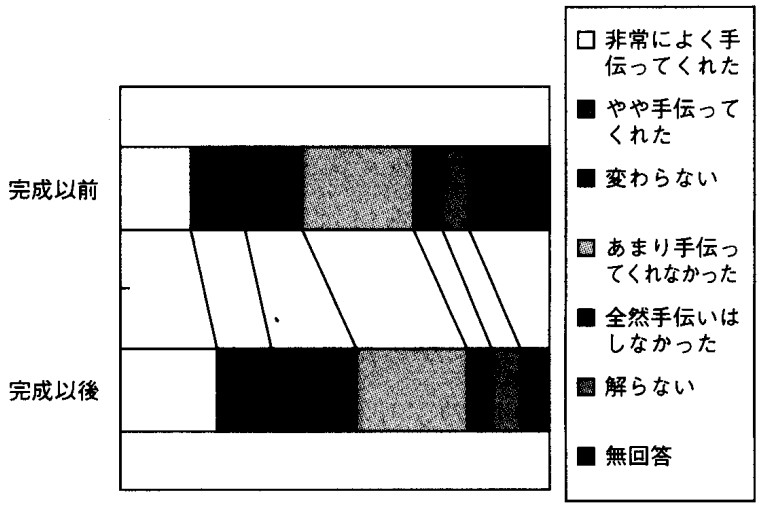
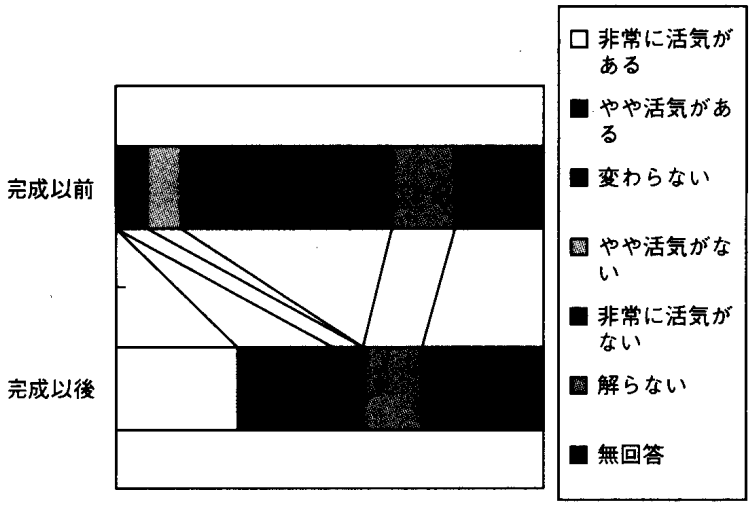


表12　建設による生活状態について（保護者）



働力としての存在は大きい。また家畜の世話，水汲みなど仕事は時間もとられるし肉体労働でもある。さらに義務教育が終わるや否や，家計を支えるために働かなければならない。山岳地帯では経済的にも恵まれない家庭の事情もあって，子供たちは就学世代中でも家計の手助けをするのは自然である。こうした家庭内の役割が，学校が完成し登校が日常化するにしたがって，校舎建設が以前と以後子供たちの生活をどのように変化させたか保護者に質問したが，結果として大きな変化はない。子供たちは朝夕の時間を上手に使い分けて，これまでと同じように家事を手伝っており，親たちはそのことに満足している。かえって役割分担がより明確になされるよ

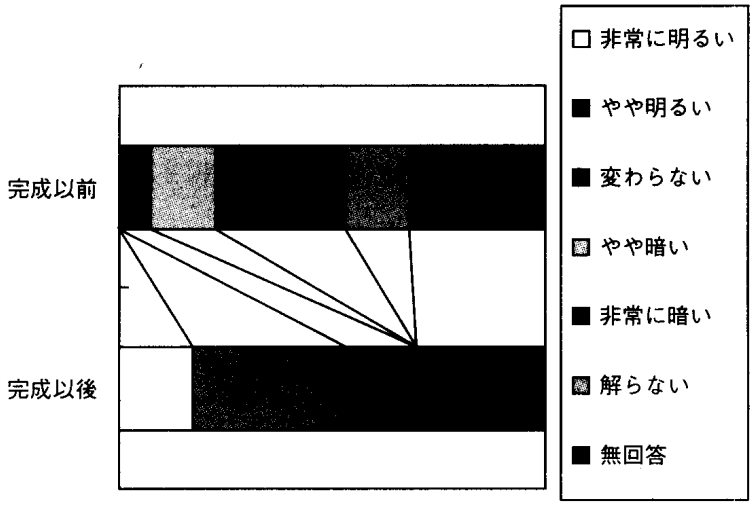
うになったのである。また親も「勉強している」のだから，と手伝いに関しては大目に見て，むしろ勉学に励んでくれることを期待している傾向もある。

“校舎ができた”ということが，家庭内の彼らの生活にどのような影響を与えているかという質問に対しては，校舎が無かった当時は，天候次第の授業では，毎日通学するということや勉強するという習慣も強くなかったが，だからといって子供たちが自由で，その分今より活気にあふれていたという印象をもっていた人はいない。むしろ今よりは，「非常に活気を失っていた」が7人と多く，理由も「学校が遠いので」行かせたくても無理だったが4人，「学校がなかった」が2人であった。

完成後はその分だけ，「非常に活気が出てきた」「やや活気が出てきた」と答えた者が合わせて7人で，理由も5人が「学校ができたから」と答えている。

子供たち自身が明るく元気になり，家庭そのものも活気に満ちていることがわかる。『子供たちの反響について』は，“勉強したくてもできなかった”，“学校へ行きたくても行くことができなかった”という状況に置かれていた子供たちに，校舎の建設という環境の変化が，どのような反響を呼んだのか。

表13　子供たちの反響について（保護者）



以前は「天気の良い日だけ登校（広場教室）するか，ときどき隣村の学校に行っていた」ので，毎日家事の手伝いに追われて村の子供同士で遊ぶということも少なかったから，今に比べると子供の話題も少なく，明るさも違っていた。が，今では字が書けるというだけでなく話題が多く，非常に明るくなったと6人の保護者は同じような回答であった。

しかし，無回答者が以前で5人，以後で4人と多いが，何度と繰り返し質問しても回答がなく，質問の意図を理解してもらえなかったのか，言葉そのものが通じなかったのか，詳細を知ることができない。

未就学生徒をかかえる保護者に対して，教育や就学の重要性に理解を得るには，子供たちの成長という長い時間が必要である。また，教員の地道な働きかけと地域社会の積極的な姿勢が，やがて保護者にも浸透していくと考える。また保護者は校舎のない広場の学校と違って，子供たちが登校することが日常化したこと。また，学校のカリキュラムが充実したことで，以前よりも子供たちの意識が高まったことによって，保護者自身が教育のもつ子供たちへの影響を感じ取るようになってきた。また，保護者は子供たちと学校を通して自分たち自身が地域社会の中で参加しなければならない行事がふえてきたことなど，多くの刺激を受けていることが聞き取りの中で感じとれた。

「学校教育」を通して，親と子が地域や学校を共有できるようになってきている。

生徒自身も『登校状況について』の問いには校舎が完成したことで，友達も多くできたと答える者が多かったが，保護者や教員が答えたほど生徒たちの登校状況は高くなく，男子生徒は完成以前は24名中「毎日来ていた」が1人，「時々来ていた」が11人と正直である。

数字上は半数が「毎日・時々来ていた」ことになる。が，「あまり来ていなかった」が6人もいた。完成以後は「毎日学校に来ている」が12人，「時々来ている」が8人で，男子生徒の登校率は83%。しかし，「時々」と答える生徒もなお8人いる。8人の子供たちは「遠距離通学」や「家庭の

表14-1　友達の登校状況について（男子生徒）

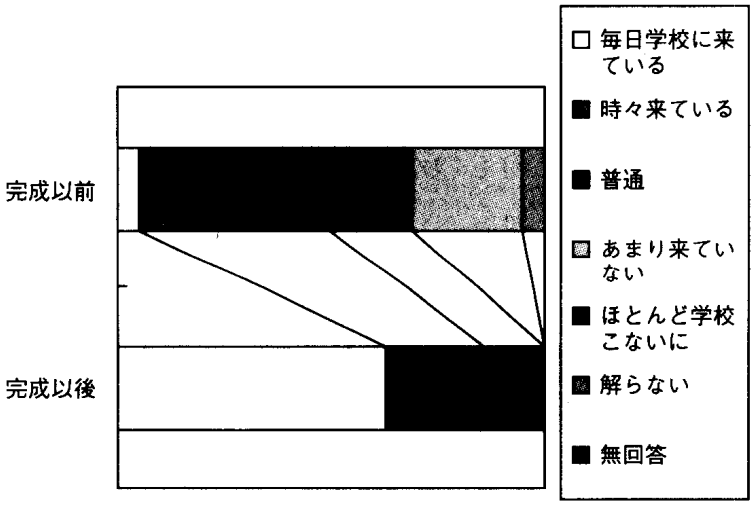
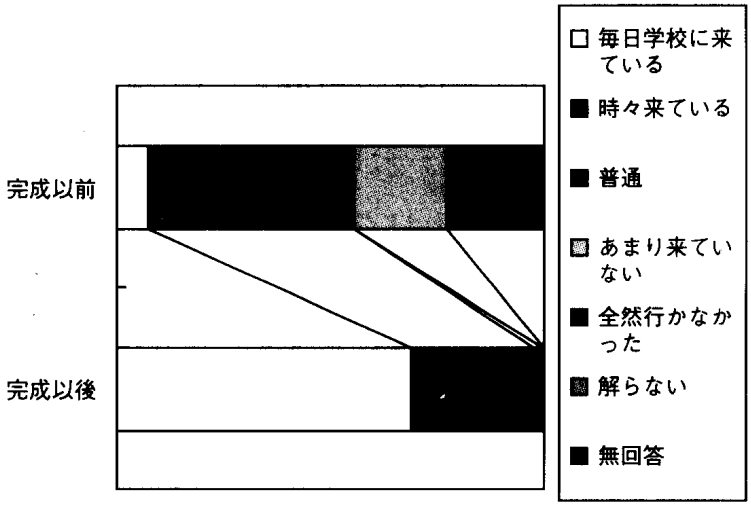


表14-2　友達の登校状況について（女子生徒）



事情」及び「勉強が嫌い」「その他」である。

女子生徒は，完成以前も15名中「毎日学校に来ていた」が１人，「時々来ていた」が７人で，53%だった。完成以後は「毎日来ている」が10人，「時々来ている」が４人。この４人の理由は男子の場合と似ている。

保護者や教員は我々ボランティアに対して，気を遣った回答であったことを差し引かなければならず，どこの国や地域も子供たちにとって勉強は嫌いな子もいる。

今回の調査は簡単なアンケート用紙をそれぞれ教員，保護者，生徒に渡

し，その記入にさいして，現地出身の日本語通訳と一緒に，直接インタビュー（聞き取り）する方法をとった。保護者には文盲もいたし，質問の意味が理解できない者もいたからであるが，応じてくれる被調査者が少ないということ，また回答そのものが簡素なものに終わっていることは，彼らにとって調査そのものに慣れないということと，我々のボランティアで校舎ができたという遠慮などが大きな理由であった。しかしながら，総じて校舎ができたことを喜び，子供たちが天候に左右されずに通学することで，家庭も地域社会も以前より活力が出たという感想をもっていることが感じられた。

終　わ　り　に

一年を通して約半学期が雨季という地域で，そのうえ2,500 m の高地，わずかな日陰をもつ木の下で，黒板も，屋根すらない青空教室で勉学に励む子供たち。学校が無くても教育は受けられる，子供たちへの教育の第一歩は，「勉強したい」「勉強しなければならない」という気持ちを持たせることが重要ではあるが，やはり学習意欲の向上は常設の校舎であり，天候に左右されないで授業が受けられる環境である。それには行政と保護者の積極的な実践が必要であるが，限られたネパールの財政では山村僻地までは現在のところ難しい。

しかしながら，ネパールも世界的な経済環境の中に取り組まれ，山村の生活も現金なしでは日常の暮らしもままならない状況にある。都会に出ればより豊かな暮らしが可能になるという情報は山村僻地に住む彼らにとっても一般的となっている。そのためには子供たちに教育を受けさせなければならないということは，多くの家庭の中で日常に語られる時代でもある。

それでもネパールは開国以来，教育の普及は著しく，そのことが人の流動化を活発化し，村から都会へ人も出るが，都会から村へ多くの情報も入って，村の暮らしを大きく変えてきたことも事実である。

今ではネパールの山村でも，日本でいう保護者会の開催がある。日本の

小学校と同じように，三者懇談会・学級懇談会・授業参観日・学年懇談会と様々な機会があり，内容も多彩だ。講演会，ゲーム，オリエンテーリング大会，料理教室……生徒とともにゲームしたり，食事会を開催したりして密接な繋がりを持っている。保護者はこうして，度々学校を訪問している。しかし，高学年になるにつれてこうした保護者との会は減少していく。その分だけ学校という場を子供たちだけの限られた場とするのではなく，地域の生涯学習の場として，広く活用していく必要性が高まっている。

しかし，現実には学校そのものがない。また校舎がないという場合も少なくない。さらには教員を雇うだけの財源が村にはないという場合も多い。子供に教育の機会を与えることで，子供たちは都会へ出て働き，村は老人と幼い子供たちだけになって，村の自治機能が崩壊するというパラドクスもあるが，それでも村が流通経済に組み込まれてしまった現状では教育の振興は避けられない現実問題もある。

今，途上国に属する多くの国や地域が，20世紀後半に急激な早さで世界経済の動きの中へ組み込まれていった。ネパールのようなアジアの内陸部のGNP 300ドルという極貧経済地域ですら，すでに世界経済の変動と無縁ではいられない。まして一国の財政が先進国からのODAの動向に大きく影響するという状況の中で，国幹をなすインフラの整備をはじめ，教育政策という長期的国家計画が，外国の援助に左右され，現実には自立できないままでいる。

すでにネパールの教育にも国内の地域経済と同じように地域格差が生じ，そのことが新しい社会問題を生じさせている。この調査報告はそうした教育と地域社会の変容を探ったものである。

日本が経験し，そのあと東アジア，東南アジアが経験してきた国際経済の地域格差，また国内では農村から都市への人口流出，地域社会の崩壊という「過疎化」現象の中で，落差の激しい山村僻地の教育の充実には，経験した東アジアの先進国と同じように実に多くの社会問題が表面化している。ODAそのものが長く被援助金のインフラ，特に都市部に集中していた

ことにも問題があった。

引 用 文 献

(注1)　田村真知子著　もっと知りたいネパール「チベット・ビルマ語系諸民族(1984)」(石井溥編) 1986　p 118。

(注2)　松田　實訳。「フレンドシップ預貯金の貸付け金」フレンドシップ協同組合編　1997　pp. 1–18

(注3)　suman krishna Jirel 著.　The Jirels of Nepal 1992.　pp. 1– 50.

参 考 文 献

(1)　Nepal District Profile NRA.　1999.

(2)　フレンドシップ預貯金の貸付け金と協同組合のシステム．1997.

(3)　Dolakha Declaration.　1998.

(4)　Educational Statistics of Nepal.　Ministry of Education.　1992–1996.

Summary

The Effects of School Construction on the Residents of a Remote Region of Nepal (1) ——A Study of the Jirele People Living in the Aran Area of Jiri Village——

Minoru Matsuda and Takeyoshi Higuma

Within the many issues of Officia Development Assistance (ODA), non-goverment organization (NGO) activity has gathered much attention and significance in this eral international assisitance.

This paper analyzes the conscious changes that have occurred within the people effected by the elementary schools that have been built in the remote mountainous areas of Nepal since 1995 through the author's international assistance Program.